

## W. クーパー 小論

宇佐美 道雄

外国語教室  
(1968年9月9日受理)

## A Short Paper on W. Cowper

Michio USAMI

Department of Foreign Language  
(Received September 9, 1968)

In the present age, W. Cowper's poetical works are always read in the abridged form, from the point of view that the poet is a Nature-poet who stands between the Classicism and the Romanticism in the history of English literature. What his poems, however, really meant in the eighteenth century in England was quite different from what they do in the modern times. Cowper's love for Nature, for example, was sometimes his ethical expression of that Evangelicalism which represented, in the field of religion, the new tendency caused by the vast change throughout the whole society in those days. In this sense, Cowper's rejoice of rural scenes, affection for feeble creatures, or sympathy toward rustic people, on the one hand, and his dislike for urban life, hatred to ruling class, or censure upon slave trade, on another hand, all these are the branches from the same stem. And the stem is deeply rooted by the poet's idea concerning God, Universe, and Man, in which, compared with J. Thomson's, the change of philosophical, religious, and moral outlook within the eighteenth century can be clearly seen. Cowper's poetry has its own meaning that has nothing to do with the modern version of his poems, and it gives us an information of the actual state of things as they stood in the human history at the time the poet wrote his poems.

現在では、ウィリアム・クーパー (1731~1800) の作品は、英詩の教材の中で、短い抜萃として以外には、めったに読まれることがない。また、その価値は、もっぱら古典派と浪漫派の間を結ぶ自然詩人という点からばかり考えられる。自然詩人としてさえも、題材となる自然が限定されているとして、しばしば非難される(註1)。クーパーの膨大な詩作品の中から、よく書けている自然描写の部分だけが選び出されるのは、そこ以外に、現代人の文学鑑賞の対象となり得るものが、見当らないからに違いない。事実、クーパーの詩の大部分は、退屈な説教で満たされているし(註2)、詩人自身も、あの5000行

を越える『仕事』を、「役に立つこと」を目ざして書いたと云っており、そしてその「役に立つ」とは、世の中の悪を絶対に容認しないこと、つまりは、福音主義を世に広めることを意味していたのである(註3)。

クーパーの作品の中で、もっとも優れた部分のひとつとして、人に親しまれている冬の夜の炉辺の描写

Now stir the fire, and close the shutters fast,  
Let fall the curtains, wheel the sofa round,  
And, while the bubbling and loud-hissing urn  
Throws up a steamy Column, and the cups,

1. W. Hazlitt, *Lectures on the English Poets* (London, 1818~9), "With all his boasted simplicity and love of the country, Cowper seldom launches out into general descriptions of nature: he looks at her over his clipped hedges, and from his well-swept garden walks; ... He shakes hands with nature, with a pair of fashionable gloves on, ... as a fine gentleman hands out a lady out to dance a minuet."
2. J. C. Bailey, *The Introduction of The Poems of William Cowper* (London, 1905), "Cowper is often narrow, commonplace, dull, it is said. We fully admit it. He allows himself too often to preach, and his sermons are antiquated, unoriginal, and extremely long. We shall make no attempt to deny it."
3. Cowper's *letter to Mr Unwin* (1784), "I can write nothing without aiming at least at usefulness: ... to contemplate the world, its follies, its vices, its indifference to duty and its strenuous attachment to what is evil, and not to reprehend, were to approve it."

That cheer but inebriate, wait on each,  
So let us welcome peaceful ev'ning in.

(*The Task*, Book IV, lines 36~41)

(さて、炬火をかきたて、よろい戸を固くとざし、カーテンを引いて、ソファーを向け変えよう。煮えたぎり、蒸気音をたてるコーヒー沸しは湯気を吹き上げ、お茶が——あの元気づけるが酔わせることのない飲みものが、みんなを待っている。さあ、静かな夕べを、喜んで迎え入れよう。)

この一節は、それに先立つ郵便配達夫の描写(註1)とともに、よく書けている点で人目をひくので、当時の田舎に住む紳士階級の生活が生きて描き出されている(註2)という意味で、あるいは、この細密な描写が、詩人の人生にたいする善良でゆとりある態度を示している(註3)という点で、更には、「この炬火歓談の一節は、……法悦とも名づくべき清浄の歓喜に輝いている」(註4)という観点から等々、各様に賞讃される。

文学作品を各人が好きなように読み、気に入った部分を取り出して、どのように論じようとも、それはそれで大切なことに違いない。ただ、前の引用の場合、クーパーの詩の選者や批評家の大部分が、引用を前記のところで止めてしまうために、そのあとに

Not such his ev'ning, who with shining face  
Sweats in the crowded theatre, and, squeez'd  
And bor'd with elbow-points through both his sides,  
Out-scolds the ranting actor on the stage:  
Nor his, who patient stands till his feet throb,  
And his head thumps, to feed upon the breath  
Of patriots, bursting with heroic rage,  
Or placemen, all tranquillity and smiles.

(*The Task*, Book IV, lines 42~49)

(顔を輝かせ、人混みの劇場に汗を流し、押しつけられ、両わきを絶えず肘でこじられながら、舞台でわめく

役者に向けて、がなり立てる、そんな人たちの夕べは、このよう〔田園生活のよう〕ではない。また、大げさな怒りをほとばしらせる愛国者〔政治家のこと〕や、落ちつき払って、いつも笑みを浮べる役人たちの、ひそひそ話しのおかげで生きているために、足が震え、頭がしびれるまで、辛棒強く立ちつくす、そんな人の夕べも、このようではない。)

のような詩行が続き、更にそのあとは、隠遁生活を称えて、反俗を推奨する長広舌へと発展することを、多くの読者がとかく見落すことに、一応の注意を払いたいと思う。つまり、冬の炬火の美事な描写を読むに当っては、それを書いた詩人本人は、田舎の静ひつな生活を、そのあとに描く都会のわい雑な生活と対比させ、余りに世俗的な当時の読書階級に、福音主義の倫理を少しでも滲透させようと図ったという事実を、ひとまず念頭に置く必要があると思う。まことにクーパーの場合には、G. トマスの言葉を借りれば、「薬を忘れて、糖衣ばかりが賞味される」(註5)傾向が強すぎるのではあるまいか。

現代の読者が、クーパーの作品の中から、自然や日常生活の迫真力ある描写ばかりを選び出して鑑賞しようとする自体は、それはそれでよい。ただ、現代人の感じ方や考え方とは全く無関係に、これらの詩は、18世紀末に書かれたのであり、その時点にあっては、宗教的な倫理的目的が第一義で、文学的表現は、いわば、目的を達するための餌の役割りを果たしたということも、一方にはあるわけである。詩を読む人間と、それを取り巻く環境が、すっかり変ったに過ぎない。わずか200年前には、宗教の持つ社会的規制力は、現代とくらべてはるかに強大であり、詩は優れた倫理的訓話でもあったのである。

いかに高級な読者でも、批評家でも、詩を読むに当って、純粹に客観的な立場に立つということは、あり得ない。同じものが、見る人によって、全く異った相貌を呈する。いまここに、クーパーの伝記的な研究の上で、それぞれに重要な貢献をなした4種の本がある(註6)。クーパーを生涯にわたって苦しめ、その作品を理解する

1. *The Task*, Book IV, lines 1~15
2. D. Cecil, *The Stricken Deer—The Life of Cowper* (London, 1929), "Cowper paints with simple pathos and gentle humour the homely life of country gentlemen in the late eighteenth and early nineteenth centuries."
3. R. Huang, *William Cowper—Nature Poet* (London, 1956), "...this particular descriptive power illustrates the good-natured and gentle-humoured attitude of the poet towards life."
4. 村上至孝『英国浪漫主義の黎明』(南霽堂, 昭和33年)
5. G. Thomas, *William Cowper and the Eighteenth Century* (London, 1936), "Cowper would have been alarmed at the thought that his sugar would continue to be relished, while his physic would be neglected."
6. 1 G. Smith: *Cowper*, 1880, MacMillan 2 T. Wright: *The Life of William Cowper*, 1892, T. Fisher Unwin 3 H. Fausset: *William Cowper*, 1928, Cape 4 G. Thomas: *William Cowper and the Eighteenth Century*, 1935, Ivor Nicholson & Watson

上で、大きな考慮を払わずには済ますことのできない、あのクーパーの狂気(註1)に関して、1) G. スミスは、それは虚弱な体質と、暗い環境の結びつきから生じた憂うつ症(ヒポコンデリー)と判断したし、2) T. ライトは、みだりに結論を下す危険を避けて、分っている限りの事実を、年代順に配置するに止めたし、3) H. フォーセは、心理学的立場から綿密な分析を加え、結局は、福音主義が、クーパーの精神を回復きでぬまでに分裂させたと断定したし、4) G. トマスは、クーパーが、生れつき外部の刺激に敏感で、肉体と精神のひどい緊張のたびに、しばしばその働きの正常を欠いたと考えた。G. トマスは、クーパーの感情や行動が、外部の状況に左右されて、絶えず一貫性を欠くことを例証した後、クーパーの狂気も、ある一定の病的状態が、長期間にわたって持続したのではないこと、また、詩人自身の苦悩や幻想の暗い言葉を(註2)、あまり字義通りに過大視してはならないこと、つまり、そこにはカルヴィン主義に通有の、一種の習慣化した言葉使いが見られることを主張した(註3)。更にこの伝記作者は、福音主義が当時二派に分裂していて、クーパーは、その折々の状況に左右されては、両者の相剋に悩んだこと、また、この二派の存在そのものが、当時のイギリス社会の二重性のひとつの現われであることを明示して、クーパーの狂気を、彼が生きた時代——環境の反映と見なしたのであった(註4)。

伝記上の事実ひとつも、見るものの立場によって、いく通りにも解釈される。すでに長い年月を経たクーパーの作品が、任意の視点から各様に読まれても不思議はない。時代や社会を超越した客観性が持ち得ない限り、現代の読者が、その個々の立場からクーパーの作品を、好みに読み、好みに論ずることは、大いに推奨されねばならない。ただ、この小論の中では、クーパーの詩が、現代の読者の中に派生させるであろう様々な文学的反応にたいしては、直接の関心が払われていない。ここでは、

ほぼG. トマス氏がなした研究の延長上に立って、これらの作品が書かれた時代と社会という歴史的脈絡の中で、それらが担っていた真の意味を、可能な限り客観的に考察し、ひいては、それを通して、18世紀後半のイギリス社会の在り方を、その時点における因果関係のままに把握して、そこに見られる文学上の諸現象を正当に理解する視点のひとつを提供しようと企図されている。

歴史の流れは、止まることがない。18世紀イギリスの歴史は、封建社会から近代社会への推移という一言に要約され得よう。もっとも、その細部に目を向ければ、無数の複雑な要素が絡み合い、われわれに荒唐無稽と見えることも、そこでは自然と見なされることがしばしばではあるが。

現在われわれは、18世紀後半の50年間に、イギリスが、明治維新後の日本や、二次大戦後のアジア・アフリカ地域に見られたような、爆発的人口増加を経験したことを知っている(註5)。また、世紀の半ばごろから、農業および工業の上に急速な変革——産業革命——が行なわれて、生産高が飛躍的に増大し、生産の形態も、共有地制から囲込み制へ、家内手工業制から工場制へ、つまり前近代的な体制から近代的な体制へと移行していったことも、よく知られている。これらの現象は当然のことながら、中産階級が社会的に進出し、文化が地方に滲透し、従来無視されていた、より多数を占める階層が、新たに社会の中心勢力としての役割りを果しはじめたという事実と表裏の関係にあった。そして、当時のこの国の宗教、哲学、文学、美術、社会学、経済学、政治学等は、これら社会的変動の緯となり経となつて、その時点におけるもろもろの因果関係を、それぞれの分野で表現したが、クーパーの詩も、このような歴史的文脈の中に読み取るとき、現代の選集に収まっているものが与える印

1. クーパーは、21才のとき以降死ぬまでに、ほぼ10年毎の間隔で、5回狂気におちいり、死ぬ前の6年間は、ついに平癒することがなかった。
2. W. Cowper, *Memoir of the Early Life of William Cowper* (1816), "Day and night I was upon the rack, lying down in horror, and rising up in despair." "There never was so abandoned a wretch; so great a sinner."
3. G. Thomas, *William Cowper and the Eighteenth Century*, "Cowper's recent biographers not only select for quotation Cowper's gloomier utterances, but take him, even in his darker moods, too much at his own word. They make insufficient allowance for his merely habitual use of Calvinistic terminology."
4. *ibid.*, "Evangelicalism had two opposing camps, and it was this conflict which found reflection in Cowper himself. One element intensified his morbidity. The other element, even while his mind disowned allegiance to it, warmed and engendered his heart." "Cowper combined in himself two characteristics which in eighteenth-century society were sharply divided."
5. ポール・マントウ、徳増・井上・遠藤訳、『産業革命』(東洋経済新報社、昭和39年)、「1600年にイングランドおよびウェールズの人口は500万、1650年に550万、1700年に600万、1750年に650万であった。したがって、人口は150年間に辛うじて150万の増加になった。それにつづく1750年から1801年の半世紀の間には、250万の人口増加があり、その増加率は前の期間にくらべて4倍になった。」

象とは、かなり異質な印象を与えることを否定できない。

18世紀を通して、中産階級が徐々に自己を確立して、政治的、社会的に伸長し、それに伴って、より下層の大衆に、社会的な関心が向けられていったということは、まさにその通りであろうが、こうした歴史の流れというもの、もっと微細な、数多くの個々の事象から成り立っているもので、それらのすべてを、現代われわれが慣れ親しんでいる諸概念で理解しようとするとき、しばしば大きな錯誤を犯すことになる。クーパーは生涯の大半を地方で暮したから、農民の生活はしばしばその題材となり、そして、そのような階層の人間を詩に歌うこと自体、すでに時流に適った新しい傾向であったが、

Warm'd, while it lasts, by labour, all day long  
They brave the season, and yet find at eve,  
Ill clad and fed but sparely, time to cool.  
The frugal housewife tembles when she lights  
Her scanty stock of brush-wood, blazing clear,  
But dying soon, like all terrestrial joys.  
The few small embers left she nurses well;  
And, while her infant race, with outspread hands  
And crowded knees, sit cowering o'er the sparks,  
Retires, content to quake, so they be warm'd.

(*The Task*, Book IV, lines 377~86)

(一日中、できる限りは労働で身体を暖め、冬にたち向う。しかし、夕方になれば、着るものもなく、食べるものも乏しく、寒い時がやって来る。つましい主婦は、身ぶるいして、そだのわずかな貯えをくべるが、それは、この世の喜びと同じくばつと燃えて、すぐ灰になる。主婦は少しの残り火を、うまく長もちさせ、子らはひざをくっつけ、火に向かって坐り、手をあぶり、まもなく寝に行く。たっぷり震えて暖まったので。)

都会を嫌悪して田園を讃美した詩人(註1)、あるいは、

住いの内部を描くことに秀いでた家庭の幸福を歌う詩人(註2)が、日々の生活の中で、長年にわたって見た農民たちの暮しの実態とは、このようなものであったから、この場合、自然や農民への愛とは、現代における審美的態度とは異った、もっと倫理的ないし人道的な意味での愛を想定しなくては、とうてい理解がつかないのではあるまいか。

一方、良い意味でも悪い意味でも、クーパーの一生と密接に結び付いていた福音主義復興運動は、究極的には、教義上の論争をこととする一部の理神論者たちの手から、宗教を、普遍的な道德感情に訴えて、一般民衆の手に取り戻すという運動であった(註3)。だから、宗教の面における大衆化という点で、それは大衆の社会的進出という全体的な変化のひとつの現われとなったが、徐々に社会的勢力を増し、重大な関心を払われるようになりつつあったとされる当時の一般大衆というものも、その実際のありようは、現代の通念からひとまず解放されなければ、やはり相当の誤解を免れないように思われる。福音主義復興の動きが、この時代にもっとも直接的な形で表現されたメソジスト運動の指導者のひとりにホワイトフィールドがいるが、この人の説教に招かれたある公爵夫人の手紙に見える「彼らの教義は、とうてい受け入れることのできないものです。すべての階級を均一にし、あらゆる身分差を無くそうと努める点で、そこには、目上にたいする不敬と無礼が強くにじみ出しています。わたしどもが、地上をはいまわる、あの隣れむべき平民たちと同じ罪深い心を持つなどと話されるのは、奇怪至極なことです」(註4)のような言葉は、200年前に一般庶民とは何を意味したかの片りんを示しているのではない。

また、メソジズム運動の初期にあつては、その説教は「事例のない場所で、露天のまま、巡回牧師によって、聖職者たちの領分を犯して」行われ、しばしば「聞くものたちのあいだに、金切り声、失神、卒倒、その他さまざまな発作的徴候を引き起した」(註5)と伝えられている。大衆の感情に訴えるということの、現代が想像する

1. クーパーには、"God made the country, and man made the town." という有名な詩行がある。
2. R. Huang, *William Cowper—Nature Poet*, "Cowper's well-known skill at describing interior scenes for which he has won the title of the 'poet of domestic happiness' should not be left unmentioned."
3. レズリー・ステューヴン、岡本訳、『18世紀における英文学と社会』(研究社、昭和31年)、「福音伝導主義一派の運動の基礎は知的なものではなく、健全な道德的なものであった。ウェーズレーは、その信条を至極当然のものと考えていたから、信条があったとすれば、それは国民大衆の信条であったのである。」
4. G. Thomas, *William Cowper and the Eighteenth Century*, "Their doctrines are most repulsive, strongly tinted with Impertinence and Disrespect toward their Superiors, in perpetually endeavouring to level all Ranks, and do away with all Distinctions. It is monstrous to be told that you have a heart as sinful as the Common Wretches that crawl the Earth."
5. *ibid.*, "...its early preaching—conducted, of all unprecedented places, in the open air, by itinerant clergymen poaching on the preserves of the incumbents—often produced shriekings, faintings, fits, and other convulsive symptoms among the listeners."

ものとの距たりは、ここにもはっきりとうかがわれる  
が、以上のような次第であったから、詩人クーパーが、  
都会を汚れたものと見て、

Thither [to cities] flow,  
As to a common and most noisome sew'r,  
The dregs and feculence of ev'ry land.  
(*The Task*, Book I, lines 82~4)

(そこには「都会には」, みんなの汚れを集める下水の  
ように, すべての土地の, かすとおどみが流れ込む。)

のごとく歌い, 一方田園の自然を愛して

Man, immured in cities, still retains  
His inborn inextinguishable thirst  
Of rural scenes.  
(*The Task*, Book IV, lines 766~8)

(人は都会に閉じ込められていても, 田園の風景への  
消し難いあこがれを, 生れながらに持つ。)

あるいは,

I have lov'd the rural walk through lanes  
Of grassy swarth, close cropt by nibbling sheep,  
(*The Task*, Book I, lines 109~10)

(私は, 羊が食んで, 一面に短くなった草地を通っ  
て, 田舎道を歩くのが好きだ。)

などと繰り返えし歌う気持ちに,

If I survive thee I will dig thy grave;  
And, when I place thee in it, sighing, say,  
I knew at least one hare that had a friend.  
(*The Task*, Book III, lines 349~51)

(わたしが, おまえより長生きしたら, わたしはおま  
えの墓を掘ろう。そして, おまえを埋めるとき, ため息  
をついて, ひとりの友を持った野うさぎが, 少くとも一  
匹いたと私は云おう。)

のような, クーパーの詩によく現われる小さい生きもの  
たちへの愛情を通して,

He finds his fellow guilty of a skin  
Not colour'd like his own; and, having pow'r  
T'enforce the wrong, for such a worthy cause  
Dooms and devotes him as his lawful prey.  
(*The Task*, Book II, lines 13~5)

(自分と皮膚の色が違うことを罪とし, それを正当な  
理由として, 暴虐を加える力を持ち, 同じ人間を, 法に  
適った餌じきとして犠牲に供する。)

以下, 『仕事』の第2巻に長々と展開される奴隷制制  
弾の人道主義的な愛とは, ことごとく一本に直結してお  
り, その自然愛と福音主義の倫理とは, 同じ主題を別の  
素材で歌ったものに外ならなかった。

G.トマスは, 「詩と絵画において, 自然にたいする因  
襲的な態度を打破したクーパーとコンスタブルは, 偶  
然にも, とともに低地の穏やかな川べりに暮した」(註1)とい  
うが, 平凡な自然をそのままの色彩で描いたあのコンス  
タブルの風景画が, それが描かれた時代にあっては, 狂  
人の作品と見なされたという(註2)。一方, 18世紀のイ  
ギリス画壇には, 忘れることのできない特異な画家ホガ  
ースがいる。彼は, よく知られているように, 粗野で愚  
かな当時の民衆の種々相を, すどい諷刺で描いた。ホ  
ガースの戯曲的絵画には, 「当時の散文文学に見られる  
中産階級の教訓主義と, スウィフトやフィールディングに  
見られる諷刺と, そしてディッケンズを思わせるヒューマ  
ーがある」(註3)と指摘されているが, コンスタブルの  
目立たない, ありのままの自然と, ホガースの卑賤な一  
般庶民とは, とともに当代における同じ革新的な傾向を,  
それぞれの形に表現したもので, クーパーの詩に歌われ  
る田園生活の諸相と気の毒な人々への同情心と同じく,  
それらは, ひとつの幹から出た二本の枝であった。

18世紀半ばごろから急速に進展した経済上, 政治上の  
変革は, 社会生活全体にわたる地すべりを引き起こし,  
都会生活を謳歌する少数の上流階級の支配力を, 急速に  
衰えさせた。従って, クーパーの自然愛好や下層民への  
関心が, 画壇におけるコンスタブルやホガースと同様

1. *ibid.*, "... by a happy accident Cowper and Constable, who broke through the traditionally formal treatment of Nature in poetry and art, both lived by placid lowland streams."
2. *ibid.*, "... when we gaze at a landscape of Constable, who cheered his later years by reading Cowper, it is difficult to realise that by painting Dedham Vale in its natural colours the artist did something so unprecedented that many of the sanest of his contemporaries thought him mad."
3. 桜庭信之, 『英米文学講座, 18世紀Ⅱ, ホガース』(研究社, 昭和36年)

に、この時代において担っていた新らしさというものは、

Thou polished and high-finished foe to truth,  
Gray beard corrupter of our listening youth;  
(*The Progress of Error*, lines 451~2)

(なんじ、美しく磨かれ、非の打ちどころない、半白のひげをはやせし、真実の敵、耳傾ける若者を腐らせる者。)

というチェスターフィールド卿への攻撃や、

Thou fountain, at which drink the good and wise,  
Thou ever-bubbling spring of endless lies.  
(*The Progress of Error*, lines 467~8)

(善良で賢い人たちが喉をうるおす泉、はてしなく偽りの湧き出すみなもと。)

という新聞——ジャーナリズムへの批難、さらには

a slave  
To his own pleasures and his patron's pride:  
From such apostles, oh, ye mitred heads,  
Preserve the church! and lay not careless hands  
On skulls that cannot teach, and will not learn.  
(*The Task*, Book I, lines 390~4)

(自分の快樂と、自分を聖職に引き立ててくれる者の虚栄に仕える奴れい、この使徒どもから、おお、冠をいただく司教たちよ、教会を守れ。そして、教える力もなく、学ぼうともせぬ者の頭上に、うかつに手をのせぬよう〔聖職者に任じないよう〕心せよ。)

のような国教会の腐敗牧師にたいする悪罵等、古い体制への鋭い批判と、ちょうど表裏の関係をなして、いずれも、従来の秩序が崩れて、新しい秩序の再建に向おうとする気運を表わしていた。

社会生活の中に見られたこの新旧交替の諸相は、宗教や倫理や美意識、更には、存在全体への認識の仕方、あるいは、神、人間、自然を含めた世界観のすべてともいうべき、社会現象のうちでは、もっとも根底的な面での変化とも呼応していた。当時のイギリスの宗教界にあって、1738年にウェズリーによって始められたメソジズムの運動が、素朴な国民大衆の中に、急速に勢力を拡大したことは既に触れた。この運動の中には、当時大まかにいって、カルヴィン主義の流れをくむ、教義に厳格な一派と、アルミニウム主義に属し、軟柔な考え方をする一派とがあった。クーパーは20才ごろからメソジズムの影響を受けたが、前に列記したクーパーの伝記作者たちが、多かれ少なかれ指摘したように、クーパーを生涯に何度も見舞った狂気は、——クーパーをそこへ追い込んだものも、また、そこから脱出に向かわせたものも——この福音主義と深いかかわりがあった。その上、クーパーの一生を左右するほどに深い関係のあった二人の宗教家、マダン(註1)とニュートン(註2)は、ともにカルヴィン派に属する当代屈指の指導者であった。だから、N. ニュールソンのいうように、福音主義復興運動は、クーパーにとっては、影響というよりも、むしろ環境というに近かった(註3)。カルヴィン主義は、本来、極度に理論的なもので(註4)、論理に基ずくという点で、それは当時の知識階級を引きつけたといわれるが(註5)、一方、アルミニウス派は、もっと個人個人の心情を重視し、その指導者ウェズリーにあっては、信仰による救いが、日常的な行為と無関係であるという考えは許されなかった(註6)。クーパーは紳士階級に属し、高い教養を身につけていたから、それが彼をカルヴィン主義に引き付ける力として働いたし、また、マダンやニュートンの身近かな影響力もあって、死に至るまで、少くとも信条としては、カルヴ

1. M. マダン (1726~90) は、クーパーの従兄にあたり、熱烈な福音主義者で、詩人が最初の狂気 (1763~5) から回復するに当たって、その教えが救いになった。その後クーパーは、マダンを通して多くの福音派の人々と知り合い、その運動に熱中した。
2. J. ニュートン (1725~1807) は、オウニーの牧師で、クーパーをその地に招き、13年間をともに暮した。熱心なカルヴィン派の福音主義者で、詩人はひところ彼の仕事を助けることに献身したが、それが詩人を狂気に追いやる結果となった。
3. N. Nicholson, *William Cowper* (London, 1951), "For Cowper, the movement should be regarded not so much an influence as an environment."
4. G. Thomas, *William Cowper and the Eighteenth Century*, "As a theology it is, if you grant its hypothesis, logical in the extreme."
5. *ibid.*, "Calvinism was a system based on logic, and, incredible as it may seem to-day, it attracted many intellectuals on that score."
6. *ibid.*, "The idea that salvation, coming by a momentary act of divine grace, was something wholly or relatively independent of conduct, Wesley could not tolerate."

イン主義を堅持したが、自然や民衆などにたいする日常の情緒的な面においては、しばしばアルミニウス主義への強い傾斜を示した。

All has its date below; the fatal hour  
was registered in heaven ere time began.

(*The Task*, Book V, lines 529~30)

(地上界では、すべてが予定せられしもの。宿命は、時の初めより、天上界にて定められる。)

のようなカルヴィン主義的予定説と、

One act, that from a thankful heart proceeds,  
Excels ten thousand mercenary deeds.

(*Truth*, lines 223~4)

(感謝の心から生れるひとつの行為は、報酬めあての、一万の仕事に優る。)

のような日常的道徳感情を重視するアルミニウスの心情との並存は、ある意味で、この時代の福音主義復興運動自体の中にある古い体制への依存と、新しい体制への指向の二重性を示したものと解することができる。クーパーが狂気の淵に沈むとき、彼に付きまとった幻想は、神から自分を殺せと命ぜられ、それに従わないために恩寵から見棄てられたというものであったというから(註1)、そこには、「20人のうちひとりが選ばれ、残りの19人は見棄てられる」(註2)という峻厳なカルヴィン主義予定説の呪縛の影が読み取られ、ここにも、この時代の宗教の実際に持っていた影響力が、20世紀にあっては、とうてい想像できぬものであることをうかがうことができる。

18世紀を通して、次第にその姿を明確に現わした前近代から近代への大きな変化は、それ自体が変革の一翼を担っていた福音主義復興の動きの中にさえ、教義の論理性を尊重する保守的な一派と、個々人の宗教的心情を重視する革新的な一派という対立をもたらししたが、この種の教理上の対立の背後には、更に、より根底的な、神の捉え方——神とは何であり、神と自然とは如何なる関係にあるかという問題への態度——の変化ということがあった。

From dearth to plenty, and from death to life,  
Is Nature's progress when she lectures man  
In heav'nly truth; evincing, as she makes  
The grand transition, that there lives and works  
A soul in all things, and that soul is God.  
(*The Task*, Book V, lines 181~5)

(乏しさから豊かさへ、死から生へと、自然は進み、人に神聖な真理を教える。大きな変化を見せながら、自然は、すべての中に、それぞれ魂が生き、働き、それが神であることを示す。)

という一節を、J. トムソンの『頌歌』の中に見える

Mysterious round! what skill, what force divine,  
Deep-felt in these appear! a simple train,  
Yet so delightful mixed, with such kind art,  
Such beauty and beneficence combined,  
Shade unperceived so softening into shade,  
And all so forming an harmonious whole  
That, as they still succeed, they ravish still.  
(*Hymn*, lines 21~6)

(不可思議なる天地の循環よ。そこには神のお力とみわさが、生き生きと見える。単純な一連の秩序の中にも、暖かい巧みさが美と慈悲に結び、かすかな影も影にとけて、すべては円満なすがたを作り上げる。)

のような一節と比較してみると、その相違はおのずからはっきりとしてくる。トムソンの詩にあっては、自然は、全体がみごとに造られた巨大で精巧な一箇の機械の趣きを呈し、神はそれを造って運行させているものの役割りを担う。これにたいして、クーパーの詩にあっては、自然は、絶えず生成発展する生物のようなものとして考えられ、神は自然を形成する個々の存在物の中に、ひとつずつ宿っていることになる。神と自然との関係が、一方は超絶的であるのにたいして、他方は内在的であるということもできよう。

トムソンの『頌歌』は1730年に出版され、クーパーの『仕事』は1785年に出版されたから、18世紀の中ごろ約50年が経過するうちに、神と自然にたいする概念という点で、人間たちのあいだに大きな変化が起ったことにな

1. J.C. Bailey, *The Introduction of The Poems of William Cowper*, "... the central hallucination which afflicted Cowper for the rest of his life was a persuasion that he had received the Divine command to destroy himself, and was excluded from mercy for his disobedience."
2. G. Thomas, *William Cowper and the Eighteenth Century*, "One in twenty of mankind is elected; nineteen in twenty are reprobated. The elect shall be saved, do what they will, the reprobate shall be damned, do what they can. That is genuine Calvinism."

る。普遍の理論に則った、機械的組成を持つ、静的な自然から、神秘の変化に満ちた、個別的な有機体の、動的な自然へと、それは変貌した。そして前者が理論を尊重し、理性の力を無限に信じた、啓蒙期の知識人たちの心的態度に対応した自然概念であり、後者が、個々人の尊厳を自覚し、万物の中に霊的存在を認める激動期の行動的庶民たちのそれに対応したものであることは、論を俟たない。洗練された都会生活を、人類の到達した最高の状態と見なして疑わなかった紳士階級から、産業の改善に、海外の進出に、営々と祖国の国富を増進させた中産階級への、社会的中心勢力の交替を、それは自然観の変化という面で表現していた。

クーパーが『仕事』第4巻『冬の夕べ』の中で、

Fast falls a fleecy show'r: the downy flakes,  
Descending, and with never-ceasing lapse,  
Softly alighting upon all below,  
Assimilate all objects. Earth receives  
Gladly the thick'ning mantle; and the green  
And tender blade, that fear'd the chilling blast,  
Escape unhurt beneath so warm a veil.  
(*The Task*, Book IV, lines 326~32)

(白いふわふわしたものが、ひっきりなしに落ちてくる。わた毛の薄片は、降りつつ、絶え間なく、下界のすべてのものの上に柔かくかぶさり、あれもこれも一色に塗りつぶす。地面は、厚くなる外とうを嬉しげにまとい、冷たい木枯らしを恐れる。かよわい緑草は、この暖かい覆いの下に、傷つくまいと逃れる。)

この降雪の景色を叙するに当って、詩人がトムスンの『四季』第1巻『冬』の中にみえる。

Thro' the hush'd Air the whitening Shower  
descends,  
At first thin-wavering; till at last the Flakes  
Fall broad, and wide, and fast, dimming the Day,  
With a continual Flow. The cherish'd Fields  
Put on their Winter-Robe, of purest White.

'Tis Brightness all; save where the new Snow

melts

Along the mazy Current.

(*The Seasons*, Book I, lines 230~6)

(静かな大気の中を、白いものが一面に降ってくる。はじめはちらちらと、やがて薄片が、ひっきりなしに、到るところ舞い下りて、あたりを暗くする。大切に育てられた畑は、純白の冬の長衣を身に着ける。すべてが輝きだけ。曲った水の流れに沿って、積ったばかりの雪の解けるところを除いては。)

この一節を念頭に浮かべながら書いたことは、ほぼ間違いないまい。先人の詩句を踏襲し、その変化の巧みさを競う習慣は、18世紀の詩壇にあっては、ごく普通のことであった。もっとも、クーパーは、そのような伝統に反逆し、自分は誰の真似もしなかったと主張するが(註1)もあれ、同じような用語と形象でもって、ともに夕暮の雪降りを歌いながら、この両者が読む者に与える印象は、これらの詩句の前後の文脈までを考慮に入れるなら、かなり違ったものになるのではあるまいか。つまり、トムスンの描く雪降りが、ロンドンの街中において、詩作のために描かれる、雪降りとしてはもっとも典型的なものであるのたいして、クーパーのそれは、オウニーで日々体験している目の前にある雪降りであるということであろう。引用されたあとに出てくるトムスの牛や駒鳥や野うさぎ等の描写についても、クーパーの詩によく出るそれら動物たちと比較して、やはり同じことが云い得る。このことに関して、J.C. ベイリーは「トムスンには、クーパーのそのものずばりの真実味、個人的感情のひびきが、全く欠けている。トムスンは、旅行記や博物学の本から借用した目録式的記述を、既成の修辞法で読者に読ませる。一方クーパーは、一切の書物を必要としない。彼は自分の経験の分野を決して離れようとしなから」(註2)という。要するにそれは、典型的で普遍的なものを、基準に則った正しい語法で表現することを、優れた詩と考えた時代が終って、詩の中では、日々体験される生き生きとした個々の具体物を、卒直な言葉で語ろうとする時代がきたことを示した。

1. Cowper's letter to Rev. Newton (1784), "Having imitated no man, I may reasonably hope that I shall not incur the disadvantage of a comparison with my betters. Milton's manner was peculiar. So is Thomson's."

Cowper's letter to Mr Unwin (1781), "Imitation, even of the best models, is my aversion; it is servile and mechanical, a trick that has enabled many to usurp the name of author,..."

2. J.C. Bailey, The Introduction of *The Poems of William Cowper*, "Thomson is almost entirely without Cowper's note of direct sincerity, of personal feeling. He will take us through a catalogue of descriptions borrowed from works of travel or science, ... in the established rhetorical manner. Cowper, on the other hand, needs no books, for he never leaves the field of his own experience."



アイザック・ニュートンが、1962年に『プリンキピア』を、1704年に『光学』を出したことによって、18世紀前半の思想界が、単に科学ばかりでなく、哲学、文学、倫理、宗教の分野にいたるまで、大きな影響を受けたことはよく知られている。当時の知識人たちは、「ニュートンが、引力の法則を発見して、それによって宇宙内の一切の物体に結合の原理を与え、自然界を整然と秩序づけたように、精神の世界でも引力に相当する何等かの統一原理を発見し、それによって道德界を秩序立てようと努力した」(註1)という。しかし、この力学的数学的自然解釈も、「18世紀半ばごろになると、それとは違った新しい興味と見方が盛んに起ってきた。それは、豊富で多彩な自然界を、もっと具体的に、あるがままに、動的に、発展的に眺め且つ捉えようとする新しい態度」(註2)であったわけで、ビュフォンの博物学、ダーウィンの進化論、ハートレーの連想心理学、プリーストリーの化学等は、その著しい代表であった。トムソンの詩概念に表われる一般性、法則性の尊重から、クーパーの詩概念に見られる個性、多様性の重視への変化は、18世紀イギリス思想界を一貫して流れる、上述の変遷過程のひとつの現われであることは、もはや云うまでもあるまい。

ひとつの時代が、歴史的脈絡のままに、完全に復元されるなどということは、あり得ることではない。クーパーの詩が提起するもろもろの問題を含めて、18世紀イギリスのあらゆる社会的諸現象は、複雑に絡み合っており、い解きほぐすことはできない。ただ、文学作品が意識的にせよ無意識的にせよ、作者の思想——倫理感、美意識、自然概念、宗教的信条等——と係わらざるを得ない仕方では読まれる場合には、その作者が生きた時代の「精神と風習の一般的状態」(註3)というものが、必要の範囲内だけでも正確に再現され、そしてその文脈に沿って読まれなければならない。ある時代のある場所において水か空気のようにごく自然に感じられる思想や風習が、時代と場所を異にするととき極めて特異なものに感じられ、同様に、われわれが当然のこととして受け入れている考え方や感じ方は、現代にのみ固有の、ある独特のものでしかないからである。

われわれが、道德的訓話や宗教的説教を、文学作品にとって不純な夾雑物と感ずるのと同じように、18世紀末のイギリス人たちは、

Pity religion has so seldom found

A skillful guide into poetic ground!

(Table Talk, lines 716~7)

(あわれむべし、詩の中に宗教を、巧みに導き入れること、絶えて為されず。)

のようなクーパーの詩句を、正しく、美しく、そして何よりも新鮮なものと感じたのである。クーパーの『仕事』は、出版されるや、外国においてまで爆発的に売れたと伝えられるが(註4)、これらの読者たちは、拔萃の形でクーパーの詩を読んだりはしなかったのである。

クーパーの詩の中に、封建的遺習が一枚ずつ剥ぎ取られて、近代に近ずいて行くイギリス歴史のひとつまを見てとることができるように、また、そこには、ポープの時代からワーズワースの時代へという、英詩の変貌のひとつまをも見ることができる。それは、文学とその背後にある社会の様相と動態をのぞき見る窓の役割りを果たしてくれている。

#### 参 考 書 目

Ed. J. C. Bailey : *The Poems of William Cowper*, 1905, Methuen & Co.

Ed. H. S. Milford : *Poetical Works of W. Cowper*, 1934, Oxford U. P.

T. Wright : *The Life of William Cowper*, 1892, T. Fisher Unwin

G. Smith : *Cowper*, 1880, MacMillan & Co.

H. Fausset : *William Cowper*, 1928, Cape

G. Thomas : *William Cowper and the Eighteenth Century*, 1935, Ivor Nicholson & Watson

D. Cecil : *The Stricken Deer—The Life of Cowper*, 1929, Constable & Co.

R. Huang : *William Cowper—Nature Poet*, 1957, Oxford U. P.

N. Nicholson : *William Cowper*, John Lehmann

C. Ryskamp : *William Cowper of the Inner Temple. Esq.*, 1959, Cambridge U. P.

植田虎雄：『英米文学評伝叢書29, クーパー』

昭和13年, 研究社

村上至幸：『英国浪漫主義の黎明』昭和31年, 南雲堂

L. スティーヴン, 岡本訳：『18世紀における英文学と社会』昭和31年, 研究社

『英米文学史講座・18世紀Ⅱ』昭和36年, 研究社

R. マントウ, 徳増, 井上, 遠藤訳：『産業革命』昭和39年, 東洋経済新社

1. 原一郎, 『英米文学史講座・18世紀Ⅰ, 科学思想・哲学』

2. 同 前

3. H. テーヌは、その著『英文学史』の序文の中で、「文学を理解するためには、それが関係した時代の精神と風習の一般的状態を明確に再現しなければならない」という理論を展開して、芸術社会学派の祖となった。

4. J. C. Bailey, *The Introduction of The Poems of William Cowper*, "He was read abroad as well as at home, having sixty readers at Hague alone,"